
フリークス

犬神狂介

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

フリークス

【Nコード】

N1570A

【作者名】

犬神狂介

【あらすじ】

現実と重なり合うようにして存在するもうひとつの世界、歪界を「観る」力を手に入れた高見沢恭介は、歪界を跳梁する奇怪な生物「異形」と「異形狩り」の戦いに巻き込まれていくことになる。人生の希望を失い、この世でありながらこの世ならざる世界に紛れ込んでしまった彼の運命は……

回想／歪曲励起

ひどく幼いころ、親とはぐれて迷子になったことがある。

なにがきつかけだったのかは、よく覚えていない。大方、親が目はなした際に、ごくごくつまらないものに気をとられて、狭い路地にも入り込んでしまったのだろう。

両親がいないというだけで、世界はひどくまがまがしく、不安に満ちた

奇怪なものに、子供の僕には思われた。

とんでもない化け物でも表れてきそうな気がして恐ろしくなり、父と母

の名を叫びつつブロック塀の間を泣きながら何度も転んでひざ小僧をすり

むきつつ走り抜けて、闇雲に道を曲がり、青い屋根の駅（だったと思う）

の前で疲れ果てて動けなくなり、そこでずっと泣いていた。

そうすれば、きつと母が迎えに来てくれるだろうと信じながら。

そんな保障など、どこにもありはしないのに。

太陽が中天を過ぎ、すべてを赤く染め上げながら沈んでいくころになっ

ても、だれも声をかけてはこなかった。無論、母も。

なぜかひどく裏切られたような心境になったのを覚えている。

結局、駅前の派出所に詰めていた駐在が見かねて僕を保護し、両親に

連絡をしたことでこの遭難劇はようやく幕を閉じた。

僕はたしか3日も親と口を利かなかったと思う。

母はごめんねと謝るばかりで、父は最初ひどく怒っていたが、次には

これからはきをつけるよと笑い始め、それでも僕が黙りこくっってい

ると

どうあつかったものか困ったらしく、ついにはだんまりを決め込んでしまった。

思い出せば、両親と僕との関係があまりうまくいかなかったのは、

それが始まりだった気がする。

実のところ、僕が迷った末たどり着いた駅から、そのころの家まで高々200メートルも離れていなかったのだ。

ただかこの程度の距離が、僕と両親の人生に、10年以上の断絶を

もたらしたとするならば、運命とかいう代物を扱う女神様とやらは相当地が悪いか、痴呆が進んで運命を管理する力が欠如しているに違いない。

無論、それは本当にきっかけに過ぎず、本当の原因はもっといろいろ

あることはわかっているのだけれど。

それでも、あの日もし僕が、両親の手を離さなければ。

もっと違う人生を、僕は歩んでいたのではないだろうか。

そう、今も思っている。

第一章

見上げれば死にたくなるほど青い空なので、俺は今日こそ死のう
と思つて

マキシヨンの屋上に入った。

遺書は残さない。靴も残さない。そんなの残しても恨みがましい
だけ。

思い出せばろくな人生じゃなかった。

勉強もろくにできず、馬鹿高校にしか進学できなかった俺。

クラスでまともな人間関係を構築できず、同級生とのコミュニケーションは

いすに仕掛けられた画鋏の痛みとかそんなんばっかだった俺。

バイトをすればミスだらけで先輩にいびられ怒鳴られ倒された俺。
ブチキレ反論したくもなかったがしかし根本の原因が自分の仕事の

へばさに

あることがわかってるから結局文句のひとつもいえずにごめんなさ
いを

繰り返す俺。

つうわけで心身ともに疲れ果てたわけだ。

俺は何のために生まれたのやら。無意味な人生。まあ、この世に
意味なんぞ

ありやしないのだろうか。

そう思えばますます手前がむなしくなるわけで。

学生手帳を取り出してみれば、「高見沢恭介」という俺の名前の
隣に、いかにも

とくに意味なく髪伸ばしてみましたという感じの冴えない高校生の
写真があった。

無論俺の写真だ。視れば視るほど悲しく腹が立ってくる。

どうせ死ぬんだから、こいつにもう、用はない。

思いつきり、放り投げる。生徒手帳は風にひらめきながら、歪んだ弧を描いて

落ちていき、俺の視界から消えた。

一足お先に、俺の身分証明書がロケットダイブしたので、次は俺の番。

「転落注意」と書かれた看板がへばりついた金網を乗り越える。

眼下に広がる奈落の底では、無数の人間と車が忙しそうに往来していた。

墓石のように立ち並ぶ灰色のビル。

『あなたに明るく楽しい生活を』と無言で語りまくるアドバルーンやネオン、

看板広告、オーロラビジョン。

排気ガスの臭いを含んだ風が、体に強く吹き付けてくる。

思わず、かがみこむ。ひどく、孤独だ……

『やばいって。あれ、落ちるって。本気だって』

なんだか脳内に、くそ明るい女性の声が聞こえた気がしたが気のせいだろう。

死ぬ寸前になると幻聴まで聞こえるもんらしい。

後一步踏み出せば、このくそくだらない人生に終止符を打てる。

腹の底が冷える。心がこれだけ痛めつけられているというのに、

俺の体は

死を拒むらしい。足が、動かない。

後一步だ、つつうのに。畜生。

『大丈夫よ。ああいう手合いは、死のうと決断して、いざ実行しようという

時になるとしり込みしてさんざ悩んだ末、突然吹っ切れて自殺を断念して、

また延々と同じ失敗を繰り返すものよ』

鬱のあまりに狂ったか俺。やたら脳内ボイスが聞こえるわけだが、それも後ろのほうから。今度のは、なんだか非常にハスキーで、聞くだけで

踏みつけてもらいたくなるようなクールさを秘めた声。

自虐的にもほどがあるぜ俺。つうかなぜ女の声か俺。しかも複数。死ぬ直

前だつつうのに、脳内でもかまわんから彼女ほしい病ですか俺。だとしたら

どうしようもねえですよわれながら？

何とはなしに振り返る。

赤くてらてらと輝くどう見ても鎧にしか見えないものを身にまとった高校生ぐらいの年

の小娘が一人。好奇心たつぷりの視線を寄せている。

もう一人は、頭に先のとんがったつばの広い帽子と、妙にだぶだぶのバスローブの化け物み

たいなやつを着込んだ二十歳ぐらいの女。強い日差しが照り付けてやがるといふのに、帽子

から髪から服装から何から何まで黒づくめ。こちらはカラーコンタクトでも嵌めて

いるのか、エメラルドのように鮮やかな緑の瞳にやたら冷ややかな光を浮かべて

俺を見つめていた。

冷ややかに、好奇心旺盛かつ場違い極まりないコスプレイヤーたる二人に告げた。

「誰だか知らんが今静かに死のうかなーって思ってる人間のことは放っておいて

ほしいわけだ。つうわけで即座に消えてください。お願いします」

とたんに、ただでさえ大きなたれ目をこれ以上無理というくらい

大きく見開き

ながら赤髪女はけたたましくわめき始めた。

『うつそうつそありえないなんて見えてるのねえこの人あたしたちのこと見えてるよ』

もしかして全部聞こえてたわけ冗談じゃないってばなんで見えてるの見えないって

いったよねいったよねクレアちゃんねえねえ』

『ええ、確かに見えているよね。歪力保持者が、歪界を見透かすなんて。』

いえ、過去にそういう例がなかったわけではないらしいけれど・

・・・実物を

見たのは、私もこれが始めてよ。

それにしても、何だってこんな男にそんな力が・・・』

黒髪の女もなにやら興味深そうな視線を俺に向ける。まるで珍しい動物でも見つけた

ような目つきだ。口調までもがそうなのだからなおさら腹が立つてくる。

「えーと聞こえてないんですか。とにかく消えてください。つつつか消える。お願い

だから。なんだって生涯最後にお前らみたいな人間と会話せにやならんのだ」

『この人自殺志望者なのに、なんだか結構冷静よねクレアちゃん』

『だから言ったでしょうこつこつという手合いは死ぬように見えて死なないものだから。』

大体遺書も何も残さずに死ぬ人間なんてそうそう居ないわ。

表情からは覚悟も伺えないし。みなさいあの貧弱で甘ったれた顔つき。そうとう

甘やかされて育ったのね。ああいうタイプは嫌いだよ』

「だからお前ら会話というものを知らんのかと」

『クレアちゃんクレアちゃんなんだか怒ってるみたいだよ』

『放っておきなさい。馬鹿にかかるとこちらまで馬鹿になるものだわ』

「いいから聞け」

『そういえばあと何分くらいだっけクレアちゃん』

『あと5分ほどだからもう少し待たなければならぬわね』

頭の中で酷く太く頑丈な綱が引きちぎれたらこんな音がなるかなーって言う音が

響いた。あえてひらがなで記すなら「ぶぢぶぢびぢり」だろう。

堪忍袋の緒ってこう切れるんだ。生まれて初めて知ったよありがとう。

多分俺の表情は人生で初めて激怒のそれになっていることだろう。「いいつかげん消えろー！ー！ー！ー！コスプレして街中ふらつく変態女二人に馬

鹿だのなんだの言われたくねえっ！！」

だが俺が放った人生最大の怒声を、赤い髪の少女は呆けたような表情で受け止めた。

『ほへ？コスプレ？フリーエコスプレしてないよー。仕事でこの格好してるんだよー』

『無知というのは悲しいものね。それは決しておるかさを意味しないのに、しかし

無知ほど人をおろかに見せるものはない……元がおろかならば、ますます

愚かに見えてくる。相乗ということね。哀れだわ』

なんかもういやになったので俺は飛んだ。後ろに。つまり虚空に。さよなら人生。

全身を支配する無重力感。馬鹿二人のおかげで踏ん切りがつかました。運命の神様

最後の手助けありがとう。おかげで迷いなく死ねましたくそつたれあの世にいったら

あんたを殺す。

だが突然体が宙で静止する。腹の辺りに何かが絡みつききつくつく締め上げて
いる、と知ったときには苦しいやら痛いやらで俺はばたばたと空中でもがいていた。

『気の早い男ね……もつとも、本当に死ぬ度胸があるとは思わなかったわ。

人生とは意外性に満ちているものね。

今死なれては困るから、あと4分ほど待ってもらえないかしら』

上のほう、つまりビルの屋上のほうから黒女の声が響いてきたが今の俺にはよく

聞こえない。なぜかというと非常に苦しいからだ。横隔膜だか胃だか十二指腸だかがぐいぐいと締め上げられる。

銀色の、鞭のような、蚯蚓のような何かが、俺の腹を締め上げているのだ。

風に揺られるたびに頭やら足やらに血が上ったり下がったり、腹のどこかで細胞が

つぶれたのかなんだか尋常じゃない痛みが走ったりしてともかく死ぬそつだ。

いいから引き上げると叫びそうになるが声が出やがらない。

眼下の風景が体のゆれにあわせてぐらぐらと揺れる。

『クレアちゃんクレアちゃん冷静なのはいいけどこのままだと自殺じゃなくて他殺になっっちゃうと思つ』

『大丈夫早々死ぬものではないから。人間、心臓でも破裂しない限りそうそう即死は

しないものよ』

『そっかー、クレアちゃん博識ー』

非常にたわいのない会話を繰り返されて俺の頭には別な意味でも血が上り始める。

多分今死ぬとしたら脳の血管が破裂してだろう。

ずりずりと壁が体にすれる感触。おれは屋上に、不本意極まりない帰還を果たした。

腹を締め上げていた銀色の何かが解かれる。それはクレアと呼ばれた黒女の背中から

伸びていた。

「殺す気きかーーーーーっ!!!!!!!!!!」

俺の叫びにクレアは不本意だと言わんばかりの表情を浮かべた。

『どうせ死ぬなら私に殺されるのも自殺するのも似たようなものではないかしら？』

こちらとしてはあなたにあともう分は生きていてもらわなければならぬの『

同意だ、といわんばかりに赤髪の、フリーエと名乗った少女が首を何度も縦に振る。

『助かってよかったねー。命は無駄にしちゃだめだよ、これに懲りて』

「お前らのせいで死ぬなら確かに無駄死にだってことは確信しましたよ？」

深々とため息をついて、俺はふと気づいた。

クレアという女の背中から生えている触手。驚くほどのしなやかさで、波に揺れる

海草のようにうごめいていた。これが、俺の胴体をしめあげやがったのだ。

俺はあまり科学技術だの機械だのに詳しいわけではないが、それでも、この「触手」

が、現在の工学技術の最先端のはるか先を行く何かであるということとぐらいいは分かる。

俺から、あの女の距離は概ね4メートルといったところか。落下を始めた俺の体を、

あの触手は一瞬で捕らえた。ということは、一瞬の間に4メートル・

・・・いや、落下
のことを考えるなら6〜7メートルにはなるだろう・・・の
距離を、あの触手は
一瞬にして走りぬけつつ金網を迂回しながら、さらに俺のことを空
中で絡め取るという
離れ業を演じたことになる。そんなことを可能にするような技術な
ど、今の地球に存在
しているはずがない。

思い出してみれば、あの女たちは・・・・・・・・いつ。俺の後ろに
現れたんだ？いつ。

「お前ら・・・・・・・・何者だよ？」

最初に問うておくべきだった質問を、ようやく俺は発した。

『フリユクスバルテ。世界を歪ませる遠因たる異形フリユクスを狩る、狩人バルテ。

それが、私たち』

クレアは、あいも変わらず俺を言葉と視線で見下しながら、告げ
た。

だが、そのまなざしに、どこか緊張の揺らめきがあるのは気のせ
いなのか。

『それがどういふことなのかは、その目で確かめなさい』

第一章・二

……ひどく、冷えた風が吹いた。

走り抜ける寒気に身がすくむ。高く低く響く風唸り。

着ている服が、風に翻弄され強くはためき、俺は何度もよるめいた。

陽光は照り付けて、暑いくらいだったはずなのに。

今はもう、骨の芯まで凍えそうなほどに、大気が、世界が冷えきっている……。

「来るよ。時間だよ」

フリーエが、緩んだ声で告げる。何が始まりだというのだろうか？

彼女の、どこか幼さを残した顔立ちには微笑が浮かんだままで。

しかし目が変わっていた。

こういう眼光を、おれは今までの人生で見たことがない。

それは言うなれば、研ぎ澄まされた鉞が放つ、鈍く鋭く重い輝き。

戦士の目だ。狩人の目だ。戦い滅ぼすことを決意した人間の目だ。

その唇の端が、僅かに吊り上る。悦んでいるのだ。この少女は。

「現世に居るんだよね、君は。」

でも、帰ったほうがいいと思うの。

あなたはもう役割を果たしたのだし……それに、多分見ていて楽しいものじゃ、ないから」

彼女は、斜に背負った大剣の柄を握った。

そして、身を低く屈め、顔だけで虚空を見据えている。

猫科の猛獣が、獲物に襲いかかろうとしているような。

これは、そういう構えだ。眼前にあるものすべてを滅ぼし去ることを

決意した目だ。あるいは己が滅ぼされるかも知れぬことを、当然のこと

として受け入れた目だ。

『傷々たる風血盟の龍、疾く疾く歪みの穴より出でて我が瞑敵を滅ぼし在れ……』

朗々たる声が、不意に響く。

クレアだ。背から生えた銀色の触手が6本。ひどく規則的に、しかし

それでいて複雑に。虚空に何かを描くようにしてうねっている。

彼女は目を閉ざし、無心に、歌うように、俺には意味がわからない言葉を

つむぎ続ける。

身にまとった黒いトーガが、風に絡みつかれてひどくはためいていると

いうのに、彼女はそれでも微動だにしない。

彼女もまた、何かを待ち構えているのだ。

何が起ころうとしているのだろう。何が現れるというのだろう。

身動きすることもかなわないうまま、おれは彫像のように立ちすくむ。

風が、いつそう強く吹きぬける……

そして、世界が、不意に、波紋のように揺らめき歪む。

何もない虚空から……一本の腕が突き出した。

しかしそれが、人間の腕ではないことも明白だった。

半透明の赤い肉の中、螺旋状に捻れた細い針金状の、骨を備えた、

腕。指は四本しかない。親指が、欠け落ちている。

胸を突くような異臭。のどの辺りに酸味を帯びた液体が競りあがってくる。

これは、血の臭いだ。人間の、血の、臭いだ。

フリーエが奔る。彼女の鎧もまた、血を浴びたような深紅。

彼女の背から抜き放たれる刃。陽光を映し鋭く煌き。そして、腕が突き出した

虚空に銀の弧を描く。

何も無いはずの空間から……激しく、血がしぶいた。
胸を突く臭いが吹きすさぶ寒風に乗り相共に押し寄せてきて俺を
さいなむ。

そして、それはもがきながら姿を現した。

針金を捻って作り上げた人間の骸骨。赤く透明なひも状の肉が幾
重にも幾重
にも巻かれた蠢くマネキン。

眼窩には眼球の変わりに青く輝くいびつな石が嵌っていた。

鼻は削げそこには二つの穴が開いている。

唇も、ない。たわめられたバネのような螺旋状の針金が、歯のよ
うに口の中に
並べられている。

それは、人間でありながら人間とは異なる奇怪な蠢くオブジェ。
右の肩口から、左のわき腹にかけての肉が引き裂かれていた。そ
こから奔流の

ように血潮があふれ出してとまらない。

フリーエが放った斬撃によるものだろうか。

l l o w n , o w n , o w n , o w n e e r

それは唸りながら、フリーエではなく、俺を見ていた。表情のない
顔で。

俺の視線は、うつろな青い「眼」に吸い寄せられて離れない。

歩いて、「来る」。

そう。こいつは……俺に、近づいてくるのだ。

『抗う者我が敵と我は認めたりゆえに我が盟約たる7の条命に従い
在れ』

朗々たる声、再び、響く。

いつの間に、異形の背後を取ったのだろうか？

異形の肩越しに見えるのは二つの緑の瞳。だがそこに宿る眼光は

常人のそれでは
決してない。玉虫のような、複雑に入り混じる緑の虹がその光彩に
ある。

その異様な輝きが、敵意であることは疑いなかった。

『痛みし龍よ、顎にてその痛みを癒すべし。ゆえに汝の業たるは傷
傷を移し傷にて

万物を滅ぼすを今許す。勅たる我が言葉を聞き足るならば、今ここ
に直ちに在れ！』

不意に、輝きの奔流としか呼べぬ何か。輝き唸る風としか思え
ぬものが吹き荒れる。

光の風は異形の体を食いちぎり焼き砕いていく。その中で、異形
はもがきながら……

しかしそれでも俺を見つめているのだ。

物言わぬ瞳に、何かを宿したままで。

俺は、なぜだか……歩を、踏み出していた。

嫌悪感しか沸かぬ。人間ではありえぬ、人間。歪みながらもがく
怪物。

それに向かつて、一步、二歩……

「危ないですよ」

警告意外に何の意味も持たぬ言葉。フリエだ。

フリエは頭上高々と、彼女の身の丈ほどもありそうな大剣を振り
かざした。

かざ唸りを残して、刃が一閃する。次の瞬間、異形の胴体から首
が消失していた。

異形はひぎを尽き、もがくように空中を爪で搔くと……その
のまま、たおれる。

わけもわからないまま。俺は。一步足を踏み出していた。

跳ね飛ばされた首の、青い石。瞳も白目もない奇怪な眼。

吸い込まれるように俺の視線はそれに据えられ離れない。

現実を処理しきれず焼きついた思考回路の中。俺はコンクリート

の上に転がる

首に向かって歩を進めていく。

そしてー拾い上げた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1570a/>

フリークス

2010年10月23日12時30分発行